

## 地域医療のさらなる充実に向けて



熊本県健康福祉部 医監 岩谷 典学

公益財団法人肥後医育振興会におかれましては、県民の健康増進を図るための啓発活動、地域医療の向上に向けた活動などを活発に展開され、本県の保健医療に貢献されていることに対して深く感謝申し上げます。

さて、先の七・一二の集中豪雨は、県内各地に甚大な被害をもたらしました。とくに、阿蘇地域では内牧地区、立野地区などで複数の病院、診療所が被災し、医療機能

の低下が危惧されましたが、阿蘇医療圏の公的病院、地元医師会をはじめ関係機関の連携による被災された方々の受け入れや避難所の巡回、また、犠牲になられた方々の法医学的対応などにより、阿蘇医療圏の医療機能が維持、確保されました。医療関係者のさまざまな形でのご苦労、ご尽力があつたことと思います。本県では、阿蘇医療圏などを対象に地域医療再生計画を策定し、各自治体や医療関係機関等と連携し、協力を得ながら地域医療の推進に努めてきました。この度の豪雨災害でも明らかのように、地域医療の充実には災害時に対応するために重要な対策と考えます。

県では現在、第六次保健医療計画の来年度からの実施に向け策定作業を進めています。計画では、これまでの四疾病五事業に精神疾患、在宅医療を加えた医療政策を重点的に進めることとなります。とくに、在宅医療体制の整備は主要な施策の一つと考えています。在宅医療を推進するにあたっては、さまざまな関係職種とのチームケア

が求められますが、中でも、病診連携などの医療連携は在宅医療の重要な軸であり、地域医療の中核である郡部の公的病院は在宅医療を支える大きな役割を担うことになると思います。しかし、地域の公的病院では医師不足が深刻化しており、地域医療に従事する医師の確保、人材育成、医療提供体制の整備などの対策が急がれます。

県では、医師確保対策として各種の事業を実施しています。熊大医学部のご協力を得て、地域医療システム学や地域専門医療推進学などの寄附講座の開設、医学部入学への医師修学資金貸与制度の導入など、地域医療の充実に向けた取り組みを進めているところです。今後さらに進行する超高齢社会に向き合っていくためには、大学病院をはじめ各医療機関、関係職種団体、各自治体などそれぞれの部門の役割分担と連携協働は不可欠です。県としまして、関係の方々とともに、ご理解とご支援を得ながら地域医療の推進にさらに取り組んでいきたいと考えています。

肥後医育振興会におかれましては、地域医療の振興、医学教育や医療人育成への支援、県民への医学知識の普及など、多岐にわたる益々活発な活動を展開されることと思います。肥後医育振興会の益々のご発展を祈念致しますとともに、今後とも、本県の地域医療の推進に対しなお一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 公益財団法人肥後医育振興会に期待する

## 肥後医育振興会に期待する



鹿本郡市医師会長 幸村 克典

財団法人肥後医育振興会が設立十六周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

鹿本郡市医師会は、現在では熊本市北区となった植木町と山鹿市の医師で構成する医師会です。肥後医育史の冒頭に「お国自慢は世の通性」と山崎正董先生も書かれています。今回は鹿本の紹介も兼ねてお国自慢を試みたいと思います。勿論、熊本医科大学を温めるは単なるお国自慢ではないことを申し添えます。

鹿本地区は昔から進取の気性に富んだ、教育・医療・文化の先進的土地柄であります。その先進性を垣間見ることが出来る例をいくつか挙げますと、まず明治初期の自由民権運動において県下のリーダー的存在であったことや、娯楽の少ない時代に全国的に先駆けて屈指の芝居小屋である八千代座を建設したこと、また、九州でも最初の乗り合いバスを山鹿―熊本間に開業したことが挙げられます。その中でも特筆すべきは最初に挙げた思想的先進性です。熊本が生んだ維新の十傑の一人と言われる横井小楠は、古城医学校を設立した内藤泰吉ら多くの優秀な弟子を育てていますが、その中に鹿本が生んだ自由民権運動家、広田尚がいました。横井小楠の福井藩招聘にも内藤泰吉と共に随行しています。広田は植木学校を設立し県北の若者を育て「この様

な文明的学校は慶應義塾と植木学校しかない」と記されているほどでした。戸長制度に苦しむ農民を救うため、戸長征伐を県下でも率先して指導しました。明治十年西南の役が始まると植木学校にゆかりのある人間は、熊本協同隊を結成して薩軍につき行動しました。これも単に不平士族の考えは一線を画し、民主政治を求めて、時代を先に進めるために反政府の戦いを行ったのです。この日本最大の内戦「西南の役」はどういう因果か鹿本の地で「田原坂の戦い」や「山鹿口の戦い」と呼ばれる、最大の激戦が行われたのでした。

佐野常民らによって日本赤十字社が設立され、熊本がその発祥の地であることはよく知られていますが、藩医であった鳩野宗巴ら八名が同様に官軍・薩軍の区別なく治療を行ったことはあまり知られていません。鳩野宗巴の血脈を引く十一代目の先生が当医師会で活躍されているのも何かの縁を感じます。また、当時の鹿本の医家達も、敵味方の区別なく、昼夜を問わず治療に当たったと伝えられています。医療とはあまり関係ない内容で恐縮ですが、この進歩的思想の歴史をもつ鹿本の地から今後何かを発信できればと思っています。

最後になりましたが、肥後医育振興会の諸種の活動に敬意を表しますと共に、更なる展開を期待しています。